

# C.S. ルイス『顔を持つまで』における一人称の語り手

## 他者に対する認識の深まりと愛の変容

高田ひかり

### はじめに

C.S. ルイス (Clive Staples Lewis) の最後の小説『顔を持つまで』(*Till We Have Faces*, 1956) は、アピュレイウスの「キューピッドとプシュケーの物語」をキリスト教の神と人間のドラマとして語り直した小説である。

第一部では、オリュアルは、自分とギリシア人老奴隷の「キツネ」が愛情深く育てたプシュケーを神々が不正にも奪い去ったことを非難する告訴状という形で綴る。第二部でオリュアルは、第一部の自らの語りを通して、プシュケーとキツネをはじめとする周囲の人々及び神について自分が誤った認識をし、彼らを正しく愛してこなかったことに気づき、この気づきをきっかけに神と人との和解へと向かった経緯を語る。

これまでの研究では、「信頼できない語り手」から「信頼できる語り手」へと成長する語り手の手法が、この小説の主題やルイスの神学思想とどのように関係しているのかは考察されてこなかった。そこで、本発表では、まず、神学思想を背景としたルイスの認識論に晩年に変化が起こったこと、及びその変化に伴い彼の小説における語り手の手法の変化が起こったことを指摘した。さらに、そのような変化の結果生まれた『顔を持つまで』の一人称の語り手の手法が、自らの歪んだ主観を超え、他者との和解へと向かって行くことの重要性を描くことを可能にしていることを示すことを論じた。

### 主観的な一人称の語り手の採用と神学思想の関係

1933年出版の『天路逆程』(*The Pilgrim's Regress*) 以来、ルイスの文学作品の多くは全知の語り手、もしくは客観的な一人称の語り手の手法が取られてきた。しかし、1950年前後から、一人称の語り手が語りを通して他者に対する認識を深めていくという、新たな手法を探究し始める。シェイクル (Peter J. Schakel) は、ルイスの手法の変化の要因を、彼の主観と客観に対する考え方の変化に帰している (88-90, 160-62)。しかし、ルイスの新たな語り手の手法の探究は、主観と客観に関する認識論的な考え方の変化だけではなく、彼の神学思想とも深い関わりがあると考えられる。

ルイスがしばしばその神学思想の拠り所とした思想家トマス・アクィナス (Thomas Aquinas) は、『真理論』(*Quaestiones disputatae de veritate*) の中で、原罪以前の人間について「人間の知性にはいかなる偽なる見解もなく、「認識したものはすべて確実性をもって認識したであろう」とする (下巻 1200 ; 18.6)。トマスによれば、人間は原罪において傲慢ゆえに神から離れることを選び (下巻 1201)、それまでのように真理を常に正しく認識するすべを失ってしまった。しかし、その一方でトマスは、原罪によって曇ってしまった人間の精神が神からの恩寵によって「健全に」なっていくなれば、「近づきがたい輝きである神の本質」の内に「すべての真なるものを透察する」とする (上巻 738 ; 10.11)。『四つの愛』(*The Four Loves*, 1960) における「愛着」(“Affection”) についての考察からも分かるように、ルイスはトマスの影響を受け、原罪によって神から離れてしまった人間の他者に対する認識は主観を免れ得ないため不完全であるが、人間が神の恩寵によって神に近づき、正しく他者を愛するようにならば、その認識もまた完全に近づいていくと理解していた (*Four Loves* 154-55)。

このようなルイスの愛と認識の関係についての理解は、彼の物語論にも大きく影響していると考えられる。ルイスは特に 1940 年代に護教的著作を精力的に執筆したが、その中で同時代の不可知論を激しく批判しており、この不可知論との対峙ゆえに、ルイスは小説において真理を保証する全知の語り手を好む傾向にあったと考えられる。しかし、シェイクルが指摘するように (148-51)、その後、人間は主観を免れ得ない存在だということ強く意識したことで、ルイスは次第に「信頼できない語り手」の手法を取り入れるようになった。それまでのルイスは神による真理の保証に力点を置いていたが、主観・客観に対する考え方の変化に伴い、むしろ恩寵による他者に対する愛と認識の成長に主眼を置くようになった。このような変化が、歪んだ認識をしてしまう自らの主観を超えて他者を理解するためには、神に近づいていくこと、即ち原罪以前の人間の姿の回復が重要になるということをより一層強調する『顔を持つまで』の語り手の手法に繋がったと考えられる。

### 『顔を持つまで』における語り手の成長とオリュアルの愛の変容

『顔を持つまで』における一人称の語り手オリュアル (Orual) の第一部から第二部への語りの変化を分析す

ると、以下のような性質が見えてくる。即ち、オリュアルは、第一部から可能な限り客観的な語りをしようとしており、故意に読者を欺こうとする語り手ではないが、愛と認識の歪みによって、「信頼できない語り」をしてしまうのである。彼女の愛と認識には三つの成長の段階がある。第一は、彼女が義妹プシュケー (Psyche) の破滅を招いた事件を経験している最中に、歪んだ愛ゆえに事実を歪んだ仕方で認識してしまう段階である。第二段階は、事件の顛末を第一部の形に記述する時であり、ここでは事件をできるだけ客観的に語ろうとする努力は見られるものの、当初の愛と認識の歪みを引きずっているために、語りにもこの歪みが反映されている。そして、第三段階になって、自身の愛と認識の歪みを完全に意識し、「信頼できる語り手」へと決定的な成長を遂げる。故に、オリュアルは語りを重ねるごとに「信頼できる語り手」へと成長していく語り手なのである。

プシュケーを破滅に追いやって以来、オリュアルは自分の醜い顔を隠すためにベールを被り、一番親しい人々に対しても顔を見せずに過ごす。先行研究によれば、オリュアルの外面的な醜さは彼女の霊的な醜さを、彼女の顔のベールはその醜さを隠そうとする意思や、彼女の他者との関わりの曖昧さや彼女が正確な認識を故意に避けていることを象徴する (Myers 86; Schakel 56; Jebb 114)。即ち、ベールを被るという行為は、自分の内面の醜さを隠すと同時に、他者との正しい関わりを避け、身勝手な認識に留まることを意味し、彼女が語りの中で自分の醜さを隠そうしていることと繋がっていると解釈できる。それ故に、幻の中で死者たちの法廷に連れていかれたオリュアルが、このベールを引き剥がされるという出来事は、他者との関わりを曖昧にすることができなくなる、そして自己中心的な物事の見方を奪われ、真実を見据えなければならなくなるということを示している。

ベールをはがされたオリュアルは、この小説の第一部、即ち被告である神々の不正に対する訴えを書き留めた巻物を読み上げよと言われるが、その内容は、プシュケーは自分の所有物だということと、自分はプシュケーよりも優れているのだ、という主張に終始している。これは、オリュアルが第一部で主張していたような、神々に人生を弄ばれ苦難を味わう「悲劇の女王」(the queen of tragedy) (Myers 135) の物語ではなく、一番愛していたはずのプシュケーまでも蔑み貪る、嫉妬深く貪欲で、歪んだ愛の物語である。この時初めて、プシュケーを自分の所有物と見なし、自分より劣った存在であると蔑んできた、自分の認識の歪みと傲慢さをオリュアルは直視するのである。そして、この気づきと反省によって、オリュアルは物語の結びで、プシュケーとの和解、そして神との和解へと向かうことができるようになるのである。

## 結論

ルイスは晩年、文学批評に関する自身の考えを『新しい文芸批評の方法』(An Experiment in Criticism, 1961)として発表した。その中でルイスは、人間がそれぞれ自らの主観から逃れることができない存在であることを繰り返し指摘し、「よい読書」とは、普段の生活では決して逃れることのできない自らの主観を超越し、他者の視点から物事を見ることを可能にする行為である、と結論付けている (140-41)。

原罪によって歪んだ認識しかできなくなった人類にとって、世界を複数の視点から見ることは、普通不可能なことである。しかし、ルイスの神学思想及び文学理論を表した著作からは、人間は、自らもしくは他者が語る物語を通して、歪んだ愛と認識しか持つことのできない自己を超越することを繰り返しながら、神の完全な愛と認識に近づいていくことができるという彼の考えを読み取ることができる。そして、『顔を持つまで』におけるオリュアルの成長の物語の結末は、このような人間の旅路のこの世を超えたところでの完成を示しているのである。

## 引用文献

- Jebb, Sharon. "(I Lived and Knew Myself): Self-Knowledge in *Till We Have Faces*." *Renascence*, vol. 63, no. 2, 2011, pp. 111-29. EBSCOhost. <http://web.a.ebscohost.com/ehost/pdfviewer/pdfviewer?vid=10&sid=36b10aae-6413-4804-8faf-7681c132f564%40sessionmgr4007>.
- Lewis, C. S. *An Experiment in Criticism*. Cambridge UP, 1965.
- . *The Four Loves*. Geoffrey Bles, 1960.
- . *Till We Have Faces: A Myth Retold*. Houghton Mifflin Harcourt, 2012.
- Myers, Doris T. *Bareface: A Guide to C.S. Lewis's Last Novel*. U of Missouri P, 2004.
- Schakel, Peter J. *Reason and Imagination in C.S. Lewis: A Study of Till We Have Faces*. William B. Eerdmans, 1984.
- トマス・アクィナス『真理論 (上)』、「中世思想原典集成第Ⅱ期 1」、山本耕平訳、上智大学中世思想研究所、2018年。
- . 『真理論 (下)』、「中世思想原典集成第Ⅱ期 2」、山本耕平訳、上智大学中世思想研究所、2018年。